

古事記における発想と表現の類型

——結婚譚を通して——

戸 谷 高 明

古事記についての文学史の叙述を披見するに、古事記の文学性・文章・修辭などの項目を設けてその文学的特性を説明する方法が普通であつて、伝承間にみられる発想や表現の類型について言及しているものは寡聞にして知らない。このことは伝承個々についての研究が盛んに行なわれているのに対して、伝承相互の比較、とりわけ文章の表現や発想についての伝承間の比較が閑却されてきたことの現われでもあると思う。個々の伝承間に発想や表現の類型が認められるとすると、それは発想の類似による偶然の結果だけではなく、特定の「型」にはめて、神話や伝説が語られていたとか、筆録の段階で意識的にそれらが統一されたとか、何らかの必然的条件が作用したものと推測される。殊に口頭伝承の筆録や再文字化がなされる段階では、執筆者によつて表現の類型が生じた場合もあるにちがいない。次の二つは同型の発想に加えて執筆者による表現の類型を示唆する好例であろう。（以下、引用は日本古典文学大系による）

- (1) 故、後木花之佐久夜毘売、参出白、妾妊身、今臨産時。是天神之御子、私不可産。故、請。（神代記）
- (2) 於是海神之女、豊玉毘売命、自参出白之、妾已妊身今臨産時、此念、天神之御子、不可生海原。故、参出到也。

(同前)

(1)(2)とも天孫降臨後の筑紫神話に属する一続きの伝承であり、話の骨子は「天神之御子」を「私」にあるいは「海原」に産み申すべきでないという考えと、そのことを「参出」て申し上げたという点にある。トヨタマヒメの場合は海宮が舞台になった関係から「海原」をいつているのであって、根本的には天神の御子の降誕にともなう公的な儀式を念頭に置いた発想であろうし、女性が相手の男性に妊娠および出産のことを報告するという発想は、古代における通い婚の実際に基づくものであろう。話の内容や措辞に若干異なる部分が認められるだけで、両者の類似は一目瞭然であり、筆録者が一方を意識(模倣)して表現した文章であることは間違いないが、原筆・補筆が考えられる場合は、表現の合成を考慮しなければならないであらう。表現の類似は、実際的には撰録者太安万侶の存在が大きな比重を占めているものと思われるが、しかし安万侶の筆録は「多く枝葉末節の部分であって、根幹の大半は、どうも先行の記録によって仕事をしてゐる」(朝日古典全書『古事記上』解説)とする見解もあつて、その境は分明でないといえる。

さて、古事記における類型現象は諸方面にわたってみられるが、小稿ではその中から結婚譚をとりあげ、そこにみられる発想と表現の類似をできるかぎり具体的にさぐってみることにしたい。

二

結婚譚は求婚の段階から始まるがその形式は、

(3) 其の八十神、各稲羽の八上比売を婚はむの心ありて、共に稲羽に行きし時 …… (神代記)

(4) 此の八千矛神、高志国の沼河比売を婚はむとして幸行でましし時、… (同前)

(5) 又天皇、丸邇の佐都紀臣の女、袁杼比売を婚ひに、春日に幸行でましし時、…(雄略記)

のように、誰が何処の誰(5)ではさらに誰の女であるかを述べる)に「婚ひ」をしようとしたか、求婚の相手が定まっている場合と、

(6) 是に天津日高日子番能邇邇芸能命、笠沙の御前に麗しき美人に遇ひたまひき。爾に「誰が女ぞ」と問ひたまへば、答へ白ししく、「大山津見神の女、名は神阿多都比売、亦の名は木花之佐久夜毘売と謂ふ」とまをしき。

(神代記)

(7) (天皇) 故、木幡村に到り坐しし時、麗美しき嬬子^{△△}、其道衢に遇ひき。爾に天皇其の嬬子に問ひて曰りたまひしく、「汝は誰が子ぞ」とのりたまへば、答へて白ししく、「丸邇之比布禮能意富美の女、名は宮主矢河枝比

売ぞ」とまをしき。(応神記)

(8) 天皇遊び行でまして、美和河に到りましし時、河の辺に衣洗へる童女^{△△}有りき。其の容姿甚麗しかりき。天皇其の童女に問ひたまひしく、「汝は誰ぞ」ととひたまへば、答へて白ししく、「己が名は引田部の赤猪子と謂ふ

ぞ」とまをしき。(雄略記)

(9) 天皇吉野の宮に幸行しし時、吉野の川の濱に童女^{△△}有り。其の形姿美麗しかりき。故、是の童女^{△△}を婚ひして、宮に還り坐しき。(同前)

など、偶然の機会が求婚のきっかけになっているものとに分けられる。この場合は誰が何処で女性に^{△△}遇い、その主人公が女性に誰れで、あるかを問ひ、それに対して誰の女(8)(9)は異例)で名前は何というかを答えるという形を基本にしていて、文章の構成や表現の類似が著しい。(9)は問答の部分が欠如した伝承として理解すべきであろう。求婚の相手が氏族の女であるという設定は、皇室と諸氏族との結びつきを物語る政治的意図からであるが、この基本

型は帝紀の後妃に関する記述形式——例えば、天皇：娶_二丸邇之比布禮能意富美之女、名宮主矢河枝比売（_一応神記）。（7）参照——を踏襲したものと考えてよいであろう。

婚を求められた女性については、引用の四例に「麗美人」「麗美嬪子」「容姿甚麗」「形姿美麗」などがあるように容（形）姿が麗美であることを語る（表現する）のが定石であつたらしい。同類の表現は容姿麗美・美人（神武記・勢夜陀多良比売）容姿端正（_一崇神記・活玉依毘売）美人（_一垂仁記・肥長比売）容姿麗美（_一景行記・兄比売・弟比売）麗美嬪子（_一応神記・矢河枝比売）顔容麗美・容姿端正（_一同前・髪長比売）美麗嬪子（_一同前・天日矛の妻）など、用例が多い。容姿の美麗（麗美）または端正であることが女性美の表現として常套的なものであつたことが知られよう。風土記を瞥見しても、花や紅葉、土の色、碁子などの自然物を麗しきものとして賞美してもいるが（いずれも常陸国風土記）、伊和の大神の妻、コノハナサクヤヒメは其の形が「美麗」しかつたとか（播磨国風土記・穴禾郡雲箇里）、浦嶋子を蓬山にみちびいたカメヒメの容も「美麗」しかつたとあり（逸文丹後国風土記）、大伴のサデヒコは篠原村のオトヒメコに求婚したが、ヒメコは「容貌美麗」しかつたとある（肥前国風土記・松浦郡鏡の渡）のも、古事記と共通の結婚譚にみられるものである。日本書紀になると美しい女性を美人（_一卷二）佳人（_一卷六・七）美女（_一卷八・九）などと表記し、それらの女性が容姿や容貌（さらには姿形・形容・容貌・容儀・顔容・顔色とも）の美麗（麗美・壯麗・佳麗・麗とも）・端正・温雅なることを述べ、「此国有佳人」、曰_二綺戸辺、姿形美麗（_一垂仁紀三四年三月）、「此国有佳人」、曰_二弟媛、容姿端正（_一景行紀四年二月）のように一定の形になつてゐる表現もある。古事記に多い「麗美」は「容姿麗美」（_一景行紀四年二月・八坂入媛）の一例だけであるが「美麗」とあるものは「其形美麗」（_一応神紀十三年九月・髪長姫）など十例（この中には男性や自然物をさす六例をふくむ）を数える。古事記の女性に対する形容表現が、風土記や日本書紀のそれと同じく、美しいもの、立派なものを意味する漢文表現であり、当時の一般的表現であつ

たことが以上によつて明らかである。

天皇の求婚譚には、容姿の「麗美」しい女性がいることを聞いて「喚上げ」という形のものがあつた。

(10) 是に天皇、三野国造の祖、大根王の女、名は兄比売、弟比売の二りの嬢子、其の容姿麗美しと聞し、看し、定め、其の御子大碓命を遣はして喚上げたまひき。(景行記)

(11) 天皇、日向国の諸縣君の女、名は髪長比売、其の容姿麗美しと聞し、看して、使ひたまはむとして喚上げたまひし時云々。(応神記)

(12) 爾に天皇、吉備の海部直の女、名は黒日売、其の容姿端正しと聞し、看して、喚上げて使ひたまひき(仁徳記)構成と表現の類型が顯著であり、容姿麗美・顔容麗美・容姿端正は意識的に変化を与えた表現ともみられよう。

(10) は景行紀四年二月の条に「美濃国造、名は神骨の女、名は兄遠子、弟の名は弟遠子、並に有国色しと聞しめし、則ち大碓命を遣はして、其の婦女の容姿を察しめたまふ。」とあり、女性に異伝を生じている。「国色」は国中及びぶ者のない第一等の美人を意味する漢語で、神代紀下のコノハナサクヤヒメの話に「妹は有国色として引し幸しつ。」とある二例がすべてである。「喚上げ」のほか「乞ふ」とあるもの、

(13) 故、其父大山津見神に乞ひに遣はしたまひし時、云々。(神代記)

(14) 天皇、其の弟速總別王を媒と為て、庶妹女鳥王を乞ひたまひき。(仁徳記)

なども簡略化された表現といえる。女性を召し上げたり、求める場合、(14)のように「媒」すなわち結婚の仲人(または単なる使者)を遣わすことが行なわれたらしく、(10)では御子のオオウスの命、(14)では弟のハヤブサワケの王、(11)は明確ではないが太子オオサザキの命がこれにあたるとも考えられる。神武天皇が太后となるべき美人を求められた時、天皇とイスケヨリヒメとの橋渡しを演じたオオクメの命も仲人役であつたといつてよいであらう。

偶然の機会から求婚する話には、万葉冒頭の求婚歌のように牧歌的なロマンが感じられるのに対して、「喚上げ」には権力者としての天皇と地方豪族との政略的な関係が介在するように思われるが、その中にあるのも仁徳天皇とクロヒメなどとの愛情物語は得難い例であるといえよう。召し上げられるはずの女性が天皇の意に従わず「媒」との結婚に踏み切り、権力に反抗することになったのも、一つにはこのような事情があったからではなからうか。

(10)のオオウスの命は、天皇が召し上げるはずの二人の嬢子と結婚し、他の女人を求めて詐って貢上するが、結局、弟ヲウスの命に殺される。履中即位前紀にみられるスミノエノナカツ皇子の事件も興味ぶかい話である。太子イザホワケの皇子が羽田矢代宿禰の女、クロヒメを即位前に妃に迎えようと思ひ、弟のナカツ皇子を遣して婚禮の日を告げしめたところ、皇子は太子の名を詐ってクロヒメを奸した。その時、皇子は手の鈴をヒメの家に忘れて帰ったので事が露見し、やがて近習の隼人に殺される。この事件は表面的には女性の問題が発端になっているが、本質的には皇位継承をめぐる争いであろう。(14)のメドリの王とハヤブサワケの王の物語は、大后イワノヒメの嫉妬が直接の原因で二人は結ばれたが「禮无」(記)く、「重き罪に当」(仁徳紀四十年二月)る行為として、天皇の軍に追われ共に殺されてしまう。非情な権力の前には、死によって永遠の愛を生きることが権力に対する残された唯一の反抗であり、愛の純粹を保つ手段でもあった。このような悲劇的な抗争とは別に、(11)のオオサザキの命は、召し上げられずであったカミナガヒメを父天皇から円満に譲り受けているが、このようなことは稀である。

悲恋物語といえば、允恭記のキナシノカルの太子とカルノオオイラツメの場合は不倫の恋が、垂仁記のサホビコの反乱ではサホビメをめぐる天皇と兄サホビコとの恋の争いが事件の鍵ともみられるが、カルの太子が日継の座を失い、サホビコが「吾と汝と天の下治らさむ」と述べているのによればやはり本質的には皇位争いが原因であるう。

ニニギの命がコノハナサクヤビメを召し上げた時、ヒメの父は姉のイワナガヒメも一諸に奉っている。この神話は姉妹の名に表象されている恒常と無常、生と死の起源を説明することに目的が置かれているために、姉の方は妹に添えられた形で語られているが、実際には姉妹が同時に召し上げられるという発想が基本であり、その変形がこの神話であると考えてよいであろう。このようにいうのは、姉妹が同時に召し上げられるという話が多いからである。天智天皇が四人の娘を弟の大海人皇子（のちの天武）に嫁がせていることはよく知られていることであるが、これは事情が違うので今はふれないとして、例えば(イ)孝靈天皇と「阿禮比売命・蠅伊呂杵（紀では桓某姉・桓某弟）、(ロ)景行天皇（実は大碓命）と「兄比売・弟比売」（紀では兄遠子・弟遠子）、(ハ)景行天皇と「八坂入媛・弟媛」（紀にはない）、(ニ)垂仁天皇と「兄比売、弟比売」などがあり、神話のホワリの命と「豊玉比売・玉依毘売」も姉妹という意味ではこれに加えてもよいであろう。ところが姉妹二人だけではなく、**應神天皇**はホムダノマワカの王の女「三柱の女を娶」（記）ったとあり（紀にも、名は略す）、さきの(ニ)の異伝では「美知能宇斯の王の女等、比婆須比売命次に弟比売命……四柱を喚上げたまひき。」とあり、垂仁紀十五年二月の条には「丹波の五の女を喚して、掖庭に納る。」とあつて姉妹の数がさらに多くなっている。

姉妹が揃って美しい場合はよいがイワナガヒメは「甚醜」かつたために返され、(イ)のオトヒメは「形姿穢陋」といって天皇に聴され（紀）、(ニ)の異伝、垂仁記では「其の弟王三柱（歌凝比売命・円野比売命）は甚凶醜きに因りて」生まれ故郷の丹波に返し送られたとあり、垂仁紀では五人姉妹のうち第一の姉は皇后、その妹三人は妃となったが、末の「竹野媛のみは、形姿醜きに因りて、本土に返」されたとある。記のマトノヒメと紀のタケノヒメは、返

されたことを羞じて自ら命を絶ったという。これは丹波地方に伝わっていた話であろうが、容貌形姿が「美麗」しなく「醜」いがために、彼女らのように苦しい境遇に置かれた女性も少なくなかったであろう。

結婚を承諾した女性側は、相手の男性に「百取の机代之物」と称する沢山の品物を贈ることが慣わしであつたらしく、物語の中に屢々そのことが語られている。

⑤故、其の父大山津見神に、乞ひに遣はしたまひし時、大く歎喜びて、其の姉石長比売を副へ、百取の机代之物を持たしめて、奉り出しき。(神代記)

⑥(火遠理命を)即ち内に率て入りて、美智の皮の疊八重を敷き、亦絶疊八重を其の上に敷き、其の上に坐せて、百取の机代之物を具へ、御饗為て、即ち其の女豊玉毘売を婚せしめき。(同前)

⑦(引田部赤猪子は)待ちし情を顧さずては恨きに忍びず、とおもひて、百取の机代之物を持たしめて、参出て

貢獻りき(雄略記)

婿取り婚の場合に、女性の方から男性に与えられる結納品がこの「百取の机代之物」(モモは数の多いこと、トリは持つ意、ツクエは杯・給キと据エの約とも。多数の品物を意味する。神代紀の⑤の異伝に「百取飲食」とあるによれば飲食物を意味することもある)であろうが、発想の上では多分に天孫や天皇という貴人に対する意識が働いているように思われ、殊に⑦のように老いた赤猪子が多数の品物を献上するにいたっては、あまりにも痛々しい。ワカクサカ王が妹をオオハツセの王子に奉ることを承諾した時、「言いちて白す事、其れ禮無しと思ひて、即ち其の妹の禮物として押木の玉纒を持たしめて貢獻りき。」(安康記)とある「禮物」の献上も天皇への敬意を示すためのものであり、「百取の机代之物」にも「禮物」としての意味があつたものと解されよう。求婚者の高貴な身分とそれに対する敬意のしるしとして「百取の机代之物」を献上するという発想が生まれ、表現の類型をつくりだしたものと思わ

れる。(16)に美智(アシカ)の皮や^{やしろ}絶(荒い絹)の疊を八重に敷いて款待したとあるが、ヤマトタケルの命の東征の途上、オトタチバナヒメが「海に入りたまはむとする時に」菅疊八重、皮疊八重、絶疊八重を波の上に敷きて其の上に下り坐しき。」(景行記)とある表現も海神に対する款待と神との結婚を物語るものと解される。

結婚後、妊娠した女性が産む時にあたって、相手にそのことを申し出るといふ話については冒頭でも述べたが、ここで言及しておきたいのは男性がその子について疑いを抱くといふ発想と表現である。

(18)爾に詔りたまひしく、「佐久夜毘売、一宿にや妊める。是れ我が子には非じ、必ず国つ神の子ならむ。」とのりたまひき、(神代記。日本書紀の本文と一書にも異伝がある。)

(19)童女君は、本是采女なり。天皇一夜與はして^は娠めり。遂に女子を生めり。天皇、疑ひたまひて^ひ養したまはず。(雄略紀元年三月)

また、サホビメ物語では「若し此の御子を、天皇の御子と思はし看さば、治め賜ふべし。」という、后サホビメの言葉としてそのことが言われている。(18)は火焰の中で無事出産することによって身の潔白が証明されるという神話的な発想になっているが、(19)ではその女子が天皇によく似ていたことなどによって疑いが晴れるといふ現実的な解決になっている。夫婦別居という習俗にあつては、生まれ出た子に対する疑いも現実に取り得ることであつたろう。女性が疑われる原因となっている「一夜(宿)」という発想も見のがされない。さきの(18)(19)もそうであるが、このほか、

(20)天皇、其の伊須氣余理比売の許に幸行でまして、一宿御寝し坐しき。(神武記)

(21)爾に其の御子一宿肥長比売を婚ひしましき。(垂仁記)

(22)天皇、…而して歌して曰はく、

ささらがた錦の紐を解き放けて数は寝ずにただ一夜のみ
 (元祇紀八年二月・歌謡番号六六)

三輪山式の話に類する嘯時臥山伝説にも「遂に夫婦と成りて、一夕に懷めり。」(常陸国風土記那賀郡)とあり、これによって「神の子」が生まれたとある。「一夜」という発想は神に仕える巫女の「一夜妻」の觀念や信仰に基づくものと思われ、(植物などが一夜の間に生長したという伝承も、これと関連をもつであろう)、それを天孫や天皇の物語に援用するようになったのは、天孫とか天皇を神的存在として神靈視する觀念からであらう。すなわち「天神と雖も、何ぞ能く一夜の間に、人をして有妊ませむや。」(神代紀本文、一書二・五も類似)という設問に対して、「天神は能く一夜に有娠ましむることを知らしめむと欲ふ。」(一書五)という解答を与えるための表現として「一夜」が用いられたのだといつても誤りではないと思う。

四

中つ国の経営者になるオオクニヌシの命は稲羽のヤガミヒメを妻とし、またスセリヒメを正妻とし、さらに高志のヌナカハヒメを妻問うという恋物語の主人公でもあった。悲劇の英雄ヤマトタケルの命も東国遠征の途上、オトタチバナヒメの献身的な愛を受け、また帰路には念願通りミヤズヒメとの結婚を果たすという恋に彩られた英雄でもあった。恋物語をもつ天皇といえは仁徳・雄略両帝が代表的存在であらう。

仁徳天皇は即位前のカミナガヒメとの純愛をはじめとして、後のイワノヒメの命、後の嫉妬を畏れて故郷に帰り天皇の慕情をかきたてた吉備のクロヒメと八田のワキイラツメ、予めそのことを知って天皇の求めを斥けてハヤブサワケとの悲恋に生涯をかけたメドロリの王など、天皇をめぐる女性が多い。雄略天皇は万葉に求婚歌を伝えるが、古事記では后ワカクサカベの王、約束を待つて老いたアカキコ、舞いをする吉野の童女、岡辺に隠れた春日のヲド

ヒメなどとの恋物語をもつ。一人の男性（ここでは天皇）と複数の女性とが結び合う婚姻形態、すなわち一夫多妻という多角的な人間関係にあっては愛情の構図も複雑微妙であったが、男性（夫）の愛を独占し得ぬ女性たちの悩み、殊に正妻の苦悩と嫉妬は激しく、他の妻たちを畏れさせた。

(23) 故、其の八上比売をば率て来ましつれども、其の嫡妻須世理毘売を畏みて、其の生める子をば、木の俣に刺し挟みて返りき。……又其の神の嫡后須勢理毘売命、甚く嫉妬為たまひき。（神代記）

(24) 其の太后石之日売命、甚多く嫉妬みたまひき。故、天皇の使はせる妾は、宮中に得臨かず、言立てば、足もあがかに嫉妬みたまひき。……然るに其の太后の嫉みを畏みて、本つ國に逃げ下りき。……是に太后大く恨み怒りまして、其の船に載せし御綱柏は、悉に海に投げ棄てたまひき。（仁徳記）

(25) にみられる正妻の嫉妬を、さらに複雑多岐にわたって具象的に展開させたのが(26)の嫉妬物語である。正妻の嫉妬とそれを畏れて夫の許を退いていく女性たち、この嫉妬と畏れがこれらの物語を構成する二つの面であり、スセリヒメ・イワノヒメ両物語における発想と表現の類型もそこにある。

(26) 爾に伊邪那美命答へ白ししく、「……故、還らむと欲ふを、且く黄泉神と相論はむ。我をな視たまひそ。」とまをしき。（神代記）

(26) 「……故、妾今、本の身を以ちて産まむとす、願はくは、妾をな見たまひそ。」と言したまひき。（同前）

「莫視我」「勿見妾」という妻の願いにもかかわらず、夫はその言葉をかえって不思議に思い禁を破ってしまったことになる。恥をうけた妻は夫の行為を憎み離縁にいたるが、(26)の「山幸彦」と「豊玉姫」との話では、(26)にみられる夫婦の決定的な破局とは違って、海原に別れ住むヒメは夫の「伺みたまひし情を恨み」ながらも愛情は募るばかりであったという。物語のロマン化である。水江の浦嶋（島）子が海神の女の「堅く匣を握りて、慎。な開き見

たまひそ」(逸文丹後国風土記)「この篋くわ 開くなゆめ」(万葉集卷九一・一七四〇・高橋虫麿歌集)という約束の言葉を破つて箱を開き、再会の機を失つてしまふという発想も、禁忌を侵すと破滅するという信仰が底に流れているからである。「見るな」の禁は、物語の手法としては物語の急転を予告する伏線であり、禁は破られるものとして聴者の興味をさそつたものと思われ、仁徳紀の「雌鳥皇女」物語にも足玉手玉を「莫取なれ」という表現手法が用いられている。

古代の婚姻物語には神や異類(ワニ・カメなど)と人間が結ばれるという、神婚的・異類婚的なものが多い。例えば
 (25) 其の神の御子と謂ふ所以は、三島溝咋の女、名は勢夜陀多良比売、其の容姿麗美しかりき。故、美和の大物主神、云々。(神武記)

(26) 神の子と知れる所以は、上に云へる活玉依毘売、其の容姿端正しかりき。是に丈夫有りて、云々。(崇神記)
 は両者とも三輪の大物主が容姿麗美(端正)な女を、(25)では丹塗矢に姿を変え、(26)では(神体である蛇が)立派な男に化して妻問い、「神の御子」を生ませたという話である。同じ三輪山式伝説に属する常陸の嘯時臥山伝説では又カビメの生んだ「神の子」は蛇であつたとあり、崇神紀十年のヤマトトビメの命の大物主の神との神婚譚では、櫛しげ箭はの中の「美麗うるはしき小蛇こおろち」が人と成つたとある。これらの伝説に多い、男が夜だけ訪れ顔も見せず素性も告げないという発想は、妻問婚における風習を背景にして発達したものであろう。ホヲリの命が結婚したトヨダマヒメは「八尋和邇」であり(神代記)、ホムチワケの王が一夜婚した美人カミナガヒメは蛇であつた(垂仁記)という。いずれも異類婚である。三輪山伝説は神体が蛇であることにより、異類婚と神婚の二重性をもっていることになる。なお、(26)にみられる、

乃将△△△来其矢、置△△△於三床边、忽或△△△麗壮人。

という表現と、赤玉が美女に化したという天之日矛伝説（応神記）にみられる、

將^二来其玉^一置^レ於^二床辺^一、即化^{△△△△△}美麗嬖子^二。

とが殆んど類似の表現であることを述べておきたい。

五

古事記にみられる結婚譚を通して発想や表現の類型をさぐってきたが、以上のように発想および表現の類似または一致を認めることができた。古事記を支えている旧辞は、各民族や各地方に発生した伝承であり、本来的には個々に語り伝えられたものである。しかるに個々の伝承に一致や類似がみられるということは、伝承相互に何らかの交渉があったことを意味する。もっともその中には同一の氏族の伝承に属するものであったり、同一の思考や習俗などによる偶然の結果と思われる部分もあるが、文章の表現あるいは構成にみられる一致や類似は、筆録者の問題として考察すべきであり、具体的にはそれが古事記以前の旧辞のものであるか、あるいは古事記撰録時のものであるか、あるいはまた旧辞でみられたものが撰録の段階でさらに類型化したものか、様々な場合があるに相違ない。殊に、分散していた伝承が旧辞として纏められた段階と、その旧辞を素材として古事記が成書化された段階においては、諸伝承が政治的に潤色され体系的に統一されるとともに、文章表現の改変や統一も行なわれたものと思われる。それ故、古事記における発想や表現をめぐる問題は、この視点からの考察が要求されるであろう。以上、とりあげた事どもはその端緒にすぎない。

注（１）女帝の初めである推古天皇が「姿色端麗」しかつたとあるのもその例であり、後漢書・皇后紀に同一の表現がみられる（日本古典文学大系「日本書紀下」一七二頁・頭注、参照）。

(2) この種の伝承として、日本書紀に「栗太郡の人磐城村主殷が新婦の床席の頭端に、一宿の間に、稻生ひて穂いでたり。其の旦に垂顚して熟なり。」(天智天皇三年)とあり、播磨国風土記にも「息長帯日売の命、韓国より還り上らしし時、御船この村に宿り給ひしに、一夜の間に萩一根生ひき。高さ一丈許なり。」(揖保郡萩原の里)とある。農耕儀礼などの祭で神と巫女との通婚が「一夜」に限って行われていたことを神異として伝承化したものと考えられる。